

週刊センターニュース No.238



第238号(2008年12月15日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 北海道医療大学 SCP 制度訪問調査報告 ○●○

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~kohoh/scp/top.html>

2008年12月1日に北海道医療大学(北海道石狩郡当別町金沢)に、SCP(Student Campus President・学生キャンパス副学長)制度についての聞き取り調査に伺った。インタビューではこの制度の発起人である経営企画部人事課長の高見氏、活動のバックアップのメインである学務部学生支援課の西村氏、SCPである斉藤君(薬学部3年)、廻君(歯学部2年)、上原君(看護福祉学部2年)、谷口さん(心理科学部2年)に対応していただいた。

この制度は職員によるワーキンググループで様々な議論がなされ、その中で提案されたものである。「新医療人育成のための北の拠点」となるべく、理事長のもとに「教育力向上プロジェクト」「キャンパス再構築プロジェクト」「医療機関一元化プロジェクト」の3つのプロジェクトを組織し、並行して編制された「ブランディング戦略プロジェクト」具体的施策の一環として今年度より導入された。学生に大学運営の関する諸活動に参画してもらうことにより、学生・大学の力および、教職員、学生の相互刺激、協力・サポート体制作りなどによる全学組織・人員の活性化につなげたいという目的から制度化された。提案に当たってはヨーロッパで行われている学生の副学長制度をヒントに考案された。立ち上げは昨年の初冬であり、理事会や教授会の了承を得て、今年の4月に制度の施行が決定された。そのため、初年度の活動はまだ始まったばかりであり、食堂改善アンケートをとっかかりに、今後オープンキャンパス、学内施設・サービスの改善、ブランドグッズ・商品開発などのブランディングプロジェクトの企画・実施に携わっていくことになっている。なおSCPという名称は、教員の間で副学長という肩書きを学生につけることに抵抗感があったためつくられたものである。



SCPは各学部生の中から一人、当該学部の学生による選挙によって選出される。任期は1年間で各人に活動費を支給し、報告承認の上で執行するという形である。学内に一部屋活動用の部屋が用意され、週1の活動を基本に各企画を進めていく。活動内容は学内掲示板やブログで逐次公開していくが、まだ発足したばかりのため、まずは一つの企画を進めている状況である。

現在は、10月に行った全学生を対象にした「大学に対するサービス、施設・設備等についての要望・意見を募ることを目的としたアンケート」の中で最も意見の多かった「食堂改善」について検討を行っている。学生だけでなく、教職員、さらにはオープンキャンパスに参加した高校生からの意見もあり、大学全体のニーズを反映させた活動でスタートできている。

このSCPである学生の参加動機は、たまたま誘われたから、大学が好きだから、何か役に立てる

ことがあるならというものであった。大学のために何かをしたいと思っている学生だけでなく、こうしたほんの少しの興味を持っている学生を発掘し、興味のない学生にも関わりやすいような組織として活性化を狙う意図もあるようだ。大学に対して、他人に対して興味の薄い学生の関心を引き出し、問題意識に対して自主的に動くことで学生の成長を促すことが出来る。結果的に大学の一員として自覚してもらうことで、大学全体の活性化を達成したいとのことである。

各学部1人ずつではあるが、彼らの活動をバックアップしてくれる学生も現れ、徐々に認知度を上げていく。まだまだ認知の段階であるが、学生支援課を中心として教職員全体によるバックアップを行う姿勢により、活動を行う学生と教職員間のコミュニケーションが促進され、大学を担う組織の一員としての距離が縮まっているように感じた。SCPである学生からは、「教職員に話を聞きに行くときには自分の意志というか考えを持って行かないといけなくて、それをどう熱意を考えて駆け引きが必要になる。それが勉強になる。」という学生の成長の場となっていることを表す意見とともに、「私たちは普段は普通の学生だけれど、このSCPの活動をする時間は副学長として意識した行動をとるようにしている」「これまで教員は怖いイメージで簡単な質問や話をするのができなかったが、この活動を通して意見を伺いに行く際にそのイメージがなくなった」「大学の教員や職員が、自分達が思っているよりも大学のために様々な仕事をされていることが解って株が上がっている」という意見を聞くことが出来た。学生が成長する場としてだけでなく、教職員と学生の壁を取り除く中間の存在として、大学活性化の潤滑油として機能していけるのではないかと感じた。

この制度で重要なことは学生をただのお客様として扱うのではなく、または学生に全てを任せるのではなく、教職員全体でバックアップをし、授業外での学生の学習の場としてもり立てていくことである。一部の教職員だけで活動を行っても、大学全体のブランド力向上には繋がらない。学生部長などは、学生の企画を教授会に議題として提出し、それを通してもらうための交渉を行わなければならない。学生が教職員へ協力を仰ぐ紗衣の窓口となるため、一人だけに支援が任されると活動の負担は計り知れない。大学に所属する全てのメンバーが、同じ目的に向かって何かしらの形で関与することが重要であり、より高いレベルで実現することを目標にされていると言うことが、担当の高見氏、西村氏のお話より伺うことが出来た。今後本学でも学生支援だけではなく、その他大学の活性化事業との相補的な活動を行っていくことを検討することが必要であろう。その意味で今回のSCP制度調査は一つの先進的事例として参考とすべき内容であった。

(文責：大学教育開発・支援センター 鎌田 康裕)

○●○ 雑誌のご紹介 ○●○

国内の大学・高等教育に関する政策動向や大学における取組み事例を知る手がかりとして、国内の専門雑誌である『大学教育学会誌』(大学教育学会)、『IDE 現代の高等教育』(IDE 大学協会)等が挙げられますが(センターニュースの記事においても参照・引用資料として活用されています)、外国における最近の動向を探るのに有効かつ効率的な洋雑誌(英語圏に限る)として、*Higher Education Abstracts* があります。雑誌タイトルが示すように大学・高等教育分野の文献抄録誌です。1966年に創刊し、季刊発行(Claremont Graduate Schoolより)で、2008年12月現在、43巻を重ねています。150ないし160種類の定期刊行物、学会会議録等がモニターされており、高等教育の構成員(学生、教員、職員)、機能(教育、研究、サービス、計画立案、経営)、環境(組織のミッション、国家・連邦・州等の関係、人口学的動向)等幅広い項目にわたり最新の実証研究、理論研究について、著者名、論文名、収録刊行・雑誌名の情報が提供されています。本センター図書室(総合教育1号館613号室)にも所蔵されていますので、是非ご活用下さい。